

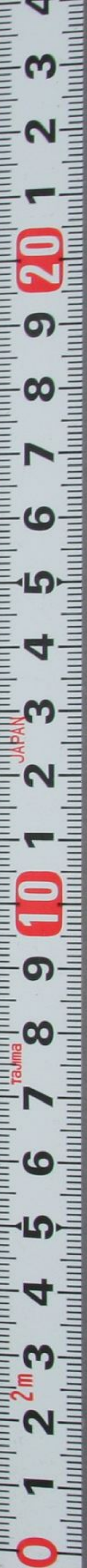
室石をめぐり  
犯罪と探偵

小西井下木白筆原稿

西垣文庫

文庫 10

8834





お探偵=ビルド

No.

あらう。

火のことは、讀者のよく知らず、所

犯罪の極め多く、稗史小説に屢々取り扱は

ある。日本では、宝石の代りに、宝剣に關する

宝石の日本に少く、欧州に多かつたため

欧州に甚多かつたことは、先述もよく、

宝石をめぐり犯罪の、大衆、日本に少く

14カ

4

1

宝石をめぐり犯罪と探偵

小酒井 不木





宝石をめぐる犯罪が、政州に於て、屢々  
 宝を中心として起つたことも、まづ、自然の道理  
 である。中にもかのフランス大革命の犠牲と  
 あり、最も不幸ある皇后マリット・アントアワット  
 を中心として、ダイヤモンド頭飾事件は、  
 最も有名であり、最も奇怪な事件として傳へられ  
 ている。尤もこの顛末を述べた足らぬ  
 思ふ。

大僧正ト・ロアング、ふとく、うとあ、皇后  
 マリット・アントアワットの不幸を被り、あるとき宮

10-30

延て、  
 皇后の機嫌を憂へ、如何にも  
 日夜、心を痛め、つてあつた。すると、大僧  
 正のこゝろ、弱みに乗じて、色々のこととを  
 金に、おうとするものゝ、沢山あつた。計劃して  
 ち、当時有名な魔術師であつた、カグリオストロは  
 魔術によつて、皇后の機嫌を、おさんことを申出  
 て、巨額の報酬を貰ふ、又、国王ルイ十六  
 世の従妹に當るド・ラ・モワット伯爵夫人は、皇后  
 にうまく取りなつてやる、お度々大僧

夫妻  
ブルボン家

かたと言つて







金を四回に掛ふことにして下さるおは、皇  
 代の機嫌は必ずおほると告げるのであ  
 大僧正は、大に、直ちに寶石高を、び寄  
 せ、頸飾を伯爵夫人に返すと、伯爵夫人は  
 小を、皇后の使者、男に返す。伯爵夫人は  
 伯爵夫人はその後大僧正を訪ね、皇后の  
 の手紙の中には、大僧正の處置に大に感  
 する旨が記され、あつて、それらの間にお  
 する。

何月何日の夜、  
 伯爵夫人は、皇后の、  
 森で古橋、  
 の夜、森に行くと、  
 を包んで、  
 大僧正に告げ、  
 大僧正は、  
 かくして皇后の機嫌は、おほつと笑てあるの  
 に、その後大僧正は、  
 といふのは、皇后の、  
 飾をか

夫  
 フルホ  
 家







新人の陳述によると、皇太后の替玉とあつて、  
 大借正に森の中を逢つたのはドリウアといふ女  
 であつて、皇太后は少くも知らぬことといふ  
 であつて。

裁判の結果、大借正は放免された。人民はド  
 ラ、マツト伯爵夫人の罪を責め、伯爵夫人は、  
 獄に投せられた。伯爵夫人は、  
 獄中に、  
 何の刑も受けて、  
 獄中では、  
 非常に、  
 苦しい、  
 生活を、  
 送つた。

共上、ローチ先には、  
 ダイヤモンド頭飾の行は、永久に解り難  
 い謎とあつて、  
 国民をして、王室にあきらめ、  
 のは事実である。間もなく、国王と皇太后は  
 無惨にも人民の手に殺されたのである。  
 1793年  
 このフランス大革命によつて覆へたのは、王  
 室の宝物は、  
 ルイ十六世の  
 断頭台の處と消え、  
 後、  
 人民政府は、  
 フランス

夫妻

ブルボン

家

②C



小等の宝を王の代々人民の血を探り取  
つゝ罪惡の徒萌てあると見做し、  
人民に示すべしあるとて、  
列して公衆の觀覽を許し、その中には名  
言い王冠や笏あり。ルイ十三世の大僧正  
リニエリウの豫め、無数の宝を鑄り、  
金の神龕もあり。その他各種の宝器は、  
燦々として陳列宝に懸り、  
と、ある朝、その寶の看守の、  
もの通り出勤すると、  
建物の名

懐かしく、宝物は悉く失はれて居る。三人は  
犯人捜索に従事し、多数の嫌疑者を拘引し、  
その一つの確な証拠あり。人々はこれ  
をきいて、  
政復古黨の仕業とあり、あるものは政府自身  
の仕業とあり、あるものは盗賊の仕業とあり、ある  
ものは看守達の仕業とあり。  
ところから、いろいろ疑惑の最中に、  
一通の匿名の手紙を交え、その手紙の中に



は奪はれし宝石を、シヤンゼリセーの豪の中に  
 控へ、あると書かれ、あつた。直ちに人を遣  
 はして捜索して見ると、給夫作の大部分が完  
 見、うらぐじ、その中のピットと名けるダイヤモン  
 ドは、遂にこの行儀が知らあつた。  
 今日あつた歴々の午紙を午が、りにして犯  
 人を逮捕することには、**比較的**あいなうと  
 あり、**わが**警察網も備へて居る。十  
 世紀の終には、**科学的**探偵法も発達して  
 居あつたので、**送ら**るに便した。一

7

送らるる人は、  
 送らるるに  
 送らるるに  
 送らるるに

10-20

八〇四年、後帝慶造君の**送らるる**の逮捕すべしと  
 す、そのうち一人が、**送らるる**の手紙を奪ひ、  
 ことを自白して、ピットの男  
 も知らあつた。  
 抑もこのピットは、**送らるる**の鑛山の  
 一坑夫によつて発見されたもので、この坑夫  
 は、**送らるる**の脚部の縮帯の中にうけてマドラス  
 運来して逃げて、**送らるる**の船長は、彼を乗船  
 せしめ、**送らるる**の船に上り、この坑夫を殺して宝石  
 を奪ひ、**送らるる**の執事をし、**送らるる**のピット

送らるるの宝石を奪ひ、  
 送らるるの執事をし、  
 送らるるのピット

10-21



に賣りつけられた。ピットはそれを買った。後ト  
 フランスのオルレアン公に十三万五千ポンドで賣った。  
 ブルボン王家の宝物と云うのである。因  
 に坑夫を殺し、船長は、巨額の金を手にした  
 りめ、酒色に溺れて、~~狂自殺~~自殺した。  
 宝飾品の奪取は去々、ピットは一八三五年  
 再びフランスに戻り、この間何處  
 をどうして来たか、うはよくわかつて居  
 ない。一説によると、ナポレオンのあるオランダ人  
 の少尉侯ととも傳へられた。又、ナポレオンの軍

資金を得るためベルリンの宝石商に買入ると  
 も傳へられた。密に角一八五五年には  
 平賣の展覽會に陳列された。一振の靚腕に付せ  
 られた。今ハルバーグに宝物館に横はつて居る。  
 この宝石は四百十カラットの重さを有  
 す。その光澤が如何にも美はくいのて、  
 極めて評判のおつてである。  
 史上有名なダイヤモンドには兎角不吉な物語  
 が纏つて居る。かのロマノフ王家に付へられた。  
 オルロフ及び山止の月の二つのダイヤモンドの

V V

三、四

かういふ







の猶<sup>工部</sup>人<sup>工部</sup>を殺して宝石を奪ひ、おほい証據をおくするたぐに<sup>かの</sup>軍人をも毒殺し、ところが三人の兄弟は宝石の分配について争ひを起し、その結果シヤフラスはとうとう、二人の兄弟を殺して、欧州各地を遍歴し、誰もその宝石を買はうとするものがあつた。

そこで彼は欧州諸国の君主に宛て手紙を書りて、宝石を買つて<sup>ロニアの女</sup>と、<sup>当</sup>時<sup>の</sup>皇<sup>カ</sup>テリナ二世は、彼を首都に招いて、<sup>かり</sup>係<sup>を</sup>し、<sup>交</sup>際<sup>せ</sup>しめ、<sup>シヤ</sup>フラス

宝石

妻買

10-20

スは六十万<sup>ルビ</sup>を<sup>以下</sup>と<sup>て</sup>も賣らふつたので、女皇は<sup>更に</sup>パニン伯爵<sup>に</sup>交際せしむることあり、伯爵はシヤフラスに豪華な生糸を送り、お供財に若くむのを待つて、宝石を手放し、めうと、<sup>早く</sup>伯爵の意中を察して、他の宝石類を賣拂つて、<sup>露</sup>都を逃げ出さうと、<sup>ま</sup>つた。

と小の<sup>長</sup>い<sup>る</sup>彼は<sup>諸</sup>國<sup>を</sup>経<sup>緯</sup>し、<sup>の</sup>妻<sup>を</sup>娶<sup>つ</sup>て、<sup>北</sup>東<sup>海</sup>沿<sup>岸</sup>の<sup>一</sup>市<sup>に</sup>、<sup>花</sup>を<sup>定</sup>め、<sup>の</sup>妻<sup>を</sup>娶<sup>つ</sup>て、<sup>再</sup>び<sup>人</sup>と

遂に



違つて交際せしめ、  
 山上の月、は首尾よく、  
 に物く、  
 取らふい、  
 まつ。

山上の月の、  
 一七年の革命のため、  
 ンス大革命の二の舞を、  
 崇りではあるまい、  
 事、  
 大キ、  
 政州の、  
 間、  
 ダイヤモンド、  
 は、  
 不吉、

は一家の平和を、  
 あるが、  
 らぬこと、  
 四、

取らぬこと、  
 ダイヤモンドに、  
 長石、  
 リン、  
 ダイヤ、  
 黄玉、  
 緑色の、  
 前、  
 何れも、  
 中に、

5  
4

ダイヤモンドの、  
 金剛石、  
 青色、



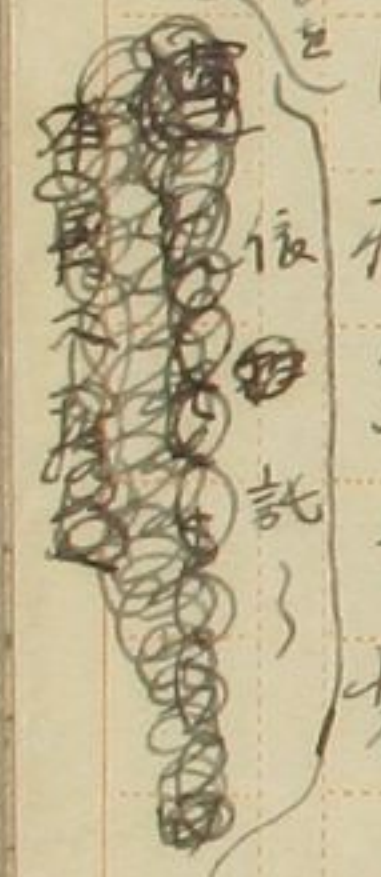
月長石と、グリーナの眼とは、何れも番人を殺して奪ひ取つたのだから、初めから不吉な縁に纏はれ、~~これ~~を手にして、~~後~~非業の死を遂げることになり居る。月長石は、英国の印度征伐に従軍して、ハリンカスル大佐がある宮殿の武岩庫の盗奪したのこ、~~大佐~~を臨終の際自分の姪レィチエルの誕生日の祝として贈る旨を遺言して、~~レィチエルの従兄~~、~~フランクリン~~の使者とあつて、彼女の誕生日に、その宝玉を携へて来た手塚と、意外にもその夜、

宝玉は何ものかの手に盗み去るのこである。~~如~~は、~~この物語~~の宝玉の失へるのこであるといふこと、この探偵カッパ~~探偵カッパ~~の他のもの、次勃によつて、~~探偵カッパ~~の即ち、~~探偵カッパ~~の即ち、祝宴の席上で、ある医師とフランクリンとの間に医薬の効力に関する論争が行はれ、その當時フランクリンは好きな煙草を棄して不眠に苦んで居る、その医師は医薬の効力の著しいことをフランクリンに知らせたため、



ひそかに酒の中に阿片を投じて、  
 翌朝そのことを先づいふと、  
 フランクリンは阿片の毒めに夢遊状態を起す。  
 やうに、隣室に寝て居る、  
 トフレートに手紙を渡す。  
 にあつてフランクリンは火くもそのことを記憶  
 自ら警察を呼ぶ等して大騒ぎをしたので、  
 借金に困つて居るゴットフレートは、  
 自らの警察を呼ぶ等して大騒ぎをしたので、  
 借金に困つて居るゴットフレートは、

その宝玉を自分のものにしてある。  
 レートは、後にその宝玉を返すに事  
 に殺さず、宝玉は  
 ガーナの眼はミータンといふ  
 国々商人ハーンと、  
 の中から盗み出した  
 人目につらぬやう本国へ運ぶ  
 一葡萄酒を一ダース買つてその  
 入水、自分病気を養つて  
 直ふ商人に





はその事情を知らなうつゝ、め、船中この  
 ト、ケ、酒を賣り拂つてしまふ。ハーンは  
 別の船で、クルックよりも先に本国に着き、ト  
 一ケ、酒を受取るうとする。右の松末あ  
 くに大に驚き、それうと。瓶の罎手を一々  
 つまみめて、捜すに、<sup>あるか</sup>その捜索  
 の模様ごころ物狂の興味の対象となつて居  
 る。ハーンは、結局ミスター・シンのために殺され、  
 宝<sup>玉</sup>は、瓶<sup>びん</sup>の罎手であつて、アメリカのある富豪  
 の手に入つた。

ラーシヤの金剛石は、ある陸軍少将の、<sup>ライオン</sup>  
 うさ黄つゝ、稀代の宝<sup>玉</sup>に纏る事件を告げ、<sup>ライオン</sup>  
 ので、探偵的興味も少くあつた。最も面白い  
 は、ある宣教師が、その金剛石を拾ひ、心の誘惑  
 に、<sup>ある勝つこと出来ず</sup>如何にそれを内容に賣り拂ふべ  
 きかに苦心する所がある。彼はダイヤモンドに關す  
 る書物やフランスの探偵小説家がボリオールの作  
 品などを讀んで研究して、結局どうすることも出来  
 ず、却つて気味の悪い事件の渦に巻き込まれて、  
 その宝玉を手離してしまふ。

(ライオン)



と、いふ盗賊が、<sup>エメラルド</sup>緑柱石に不思議な愛着心を持  
ち、名高い<sup>エメラルド</sup>緑柱石を、あらゆる危険を冒して盗  
み集める話がある。多くは、多くの実在せ  
る宝石盗賊は、盗んじ宝石を金に代へるの  
普通である。然し、<sup>宝不盗賊は、</sup>単に金を得るといふ以外に、  
有名な宝石を<sup>巧みに</sup>手に入れたる多しといふ一種の鑑  
賞を保持して居ることは事実である。  
<sup>英国の有名な</sup>あ宝石蒐集家フランスウイック公の室  
石は、之の間宝石盗賊達の狙ひ的であつた。  
公の邸は、<sup>10</sup>里にあり、<sup>10</sup>と重なる二十重の門壁

四人の連署」と「青色ダイヤ」はこれくブルランの特色

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*



四人の連署」と「青色ダイヤモンド」はそれと「ルブラン」の特色  
 を最もよく發揮して作られて、前者は「<sup>イシ</sup>叛乱の際  
<sup>地</sup>人によつて殺された奪ひ返さる事  
 士官が許さる」<sup>地</sup>人によつて殺された奪ひ返さる事  
 伴があつて「<sup>この殺人事件の探偵には</sup>シャーロック・ホームズの洗滌」、後者は「嘗  
 てフランスの王冠に鑲められたことのある有名な  
 赤宝玉石を中にとつて、アルセーヌ・リユパンの洗滌  
 する物語である。」  
 五、  
 宝石の犯罪者を引きつける重要な理由は、  
 それが非常に高價なものであること、又、  
 それが概して小さくものであることである。  
 ヘール・ホールの書「探偵小説」には、「赤狐」  
 スカレット・フォックス

る宝石盗賊は、盗んじ宝石を金に代へるの  
 普通である。然し、<sup>宝不盗賊は</sup>金を得るといふ以外に  
 有名な宝石を手に入れて見るといふ一種の慾  
 望を持つて居ることは事實である。  
 英國の有名な宝石蒐集家フランスウイック公の室  
 石は、之の間の宝石盗賊達の狙ひ的であつた。  
 公の赤邸は「<sup>10</sup>」にあり、<sup>10</sup>と重二十重の門壁



ト包まぬ、<sup>おとやかし</sup>飯で、<sup>船十萬</sup>宝石は、巨大金庫の中に  
 藏せられ、公はこの宝石を<sup>出して</sup>附めるのを死後の唯  
 一の樂々サとす。<sup>然し</sup>公は、その宝石が  
 盗賊共にも狙われ、<sup>公</sup>これを<sup>知</sup>つて、金庫には  
 無数の電線を通じ、<sup>公</sup>以外の者が近寄ると、  
 一斉にベルの鳴る<sup>やうに</sup>自動的に拳銃の発  
 射する、やうな仕掛を施す。後には、<sup>後には</sup>金庫でも満足  
 出来ず二人の警官を雇入れて、日夜警戒せしめ、  
 一八六三年公は英國生れの<sup>年若い</sup>シヨウトリ<sup>従</sup>の僕を  
 雇入れた。信賴すべき<sup>銀行者</sup>と、立派な身許の

別紙

明書と<sup>ト</sup>よつて、公は安心してこの<sup>少</sup>年を使つ  
 て居るが、シヨウトリも一生懸命に働いて、公の  
 信任は段々厚くあつて行つた。ところが半<sup>詳</sup>程  
 過ぎ、ある日、公は出入の宝石<sup>匠</sup>を招いて、  
 二三日の宝石の<sup>鑑定</sup>師を雇ひ、<sup>を待たせ</sup>るやう命じらる。  
 宝石匠<sup>を待たせ</sup>るが、<sup>だ</sup>公は、その宝石を返り出し、  
 金庫の扉を<sup>ドア</sup>あけて、<sup>あ</sup>部の外へ出て、  
 しが、<sup>部</sup>詰りして公<sup>の</sup>突つて来ると、金庫の  
 中の宝石は一つ残らず紛失して居る。気も狂  
 げあばうりに怒鳴り、公は早速警察に急を報



~~盗賊~~

警察は三ヨウの行方を探し出す。

~~盗賊~~

消息が私小あつた。

すると、一月ばかりの後、英国の某貴族に匿

名の牛乳を送つて、ブリスウウク公の宝庫を賣り

多いと申し出すのであつた。ロンドン警察はこれを

追ひつゝ、ついに、探偵

は直ちに、ブローニエに到り、某旅館で之

ヨウを逮捕した。この少年は實に英国の盗賊

連の選り出した公爵邸に匿み込んであつ

た。

素人の悪業家ばかりであつた。宝石商もまづ

たえず盗賊團に狙はれて居ることだけは返す

ない。盗賊はあつちの手段を講じて、家の模様

を研究し、よい機会を得て、盗賊を

ある時は前に書いたり、やうに雇人とあつて匿み込

み、あるときは、笑ふことも、やうに店へ入つ

て来て、盗賊を出し、もつと奪ひ取る。

宝石を自宅へ運ばせ、麻酔剤をかざせて奪ひ

取る。一八六五年、コンヒールのある宝石商を

襲つた盗賊團は、七週目以上もかゝつて、家の



内状を採つ、といはれ居る。

盗賊はクリフイ  
スヤ言つて居るやうに、

沈着の科学的鑑定を存して

居る。他人がつけ居る宝石を奪ふめには

機敏で勇敢であつてあつて又金庫の中にある

宝石を奪ふには、鋭敏な観察と、巧敏な策器と、

科学的道具を自由な操縦せねばあつてあつて

ある。一八七四年十二月デュドレ伯爵夫人が

ロンドンのある停車場で約二万磅の宝石を盗

まらんとすのめきは、宝石を持つて居る女中

の册筆の女中を馬車より助け下さうとす、  
宝石箱を舗道の上に置き、瞬間

ハート・ダイク卿の家宝であつた宝石が紛失し、

のは、ダイク卿夫人が、自分の居る盛装を

て、その宝石をつげ、うと思つた矢先、泊り合

せ居る友人に、自分の姿を見せに行つた、二三

分の間であつた。

大、

道帯

けいづかみ

ふと

盗み返つた宝石は、坂野人の手に賣りつけら  
れるのであるが、世間に名大い

知事セント  
金剛石











を奪ひ、後者の指紋を贋造して、罪を後者に  
 塗りつける犯罪が、これであり、<sup>又</sup>ビーストンの「シ  
 ヤロンの燈火」では、宝石を盗すや、人々の犯人  
 嫌疑者に ~~指紋の~~ 指紋の証據で犯人を ~~見~~  
~~出す~~ と語つて、<sup>相手</sup>を奇立させ、<sup>二筆を構へて</sup>犯人で  
 あることをしつとめ、<sup>の指紋</sup>物證が書い  
 く、指紋と、宝石 ~~の~~ とは関係の深いものと  
 なつて居る。<sup>中々</sup>  
 日本では、~~述べ~~ <sup>ために</sup>述べやうに、稀代の名王と  
 りあつたが、よく ~~述べ~~ <sup>これまでも</sup>述べた宝石に纏る不若

な指紋も <sup>おつて</sup>少く、<sup>一世を疑がすやうな</sup>宝石盗賊も  
 が、宝石の愛蔵者が多くあるに連な <sup>犯罪も</sup>  
 り、多くあるのは事實である。然し、日本人は  
<sup>昔は神々の</sup> 徳の <sup>機械的</sup> 欠乏し、<sup>国民</sup> <sup>の</sup> 科学的徳  
 を最も必要とする <sup>宝石盗賊</sup> 宝石盗賊は或は <sup>減多</sup>に  
 ないうも <sup>減多</sup>減多に <sup>減多</sup>減多に <sup>減多</sup>減多に



22

No. ....

A large grid of small squares, likely for accounting or record-keeping, with a red border and dashed lines. The grid is approximately 20 columns wide and 30 rows high. The paper is aged and shows some staining.

10-20



